

《送る言葉》

勝方＝稲福恵子先生を送る

Farewell Message for Professor Katsukata-Inafuku Keiko

「あなた今、何しているの？」と、勝方先生から突然お電話をいただいた。20年ほど前のことだったように思う。修士課程を修了してから進路が定まらず、人生初の浪人をしていた時のことだ。勝方先生からのお電話は、ジェンダー研究所を立ち上げるから参加しないかというお誘いの電話だった。

当時のジェンダー研究所の例会には、勝方先生はもちろんのこと、小林富久子先生、木村晶子先生、金井景子先生、弓削尚子先生といった専門分野の異なる先生方が参加なさっていた。とてもなごやかな雰囲気の中で密度の濃い議論がくりひろげられており、20代半ばの私にとっては何とも刺激的な場だった。勝方先生にそうした場にお誘いいただいたおかげで、研究の楽しさを改めて感じ、研究を続けるために博士課程に進学するという決意を固めることができた。

勝方先生は、1997年に早稲田大学の全学オープン科目「ジェンダー・スタディーズ」を設置し担当なさった。博士課程に進学した私は、勝方先生が担当なさるジェンダー関連の科目のティーチング・アシスタント（TA）を仰せつかった。先生は、折に触れて「私の初めてのTA」と私のことを紹介してくださった。学生にとっても人気のある先生にそのように紹介されることが、何とも誇らしかったことを覚えている。

勝方先生は講義に多彩なゲスト講師を招いてくださったが、その人脈の広さにはただただ驚くばかりだった。ジェンダーを考える上で欠かせない書籍や映画も講義内で数多く紹介してくださった。先生のご専門はアメリカ文学だが、

勝方=稲福恵子先生を送る

ご専門の枠を超えた幅広い知識や芸術的な教養も語り伝えてくださった。早稲田大学の前に、日本大学の芸術学部にお勤めだったこともうなずける。

2001年か2002年ごろだったろうか。勝方先生がジェンダーに関する読書会を開いてくださった。開いてくださったというよりも、先生のもとに自然に人が集まって、その集まる口実を読書会と呼んでいた、という表現の方があっている。その頃9号館にあった先生の研究室で、土もののコーヒークップやおいしいお菓子里に囲まれて、ジュディス・バトラの『ジェンダー・トラブル』、ガヤトリ・スピヴァックの『サヴァルタンは語るができるか』などを讀んだ。議論を引っ張る文学研究科の大学院生の他に、私のような教育学研究科の大学院生、文学部や法学部、理工学部数学科の学部生もいた。時には社会人の方もいらしたと記憶している。当時、法学部に所属していた勝方先生に直接指導する大学院生がいらっしゃらなかったからこそ、このように自由に先生のまわり集うことができていたのかもしれない。今思えば、とてもラッキーだった。

2004年に勝方先生は法学部から国際教養学部へ異動なされ、2006年からは琉球・沖縄研究所所長もお務めになった。「おきなわ女性学」の立ち上げにご尽力なさって、多忙を極める先生にお目にかかる機会が少なくなった。キャンパスでお目にかかることがあると、おきなわにゆかりのある大学院生や若い研究者の方たちを紹介してくださった。「いつだったか私もそうしていただいたなあ」と思い出しながら（心の中では少しやきもちを焼いていたのだけれど）、私は一人で立って歩いていくようにというメッセージだと思ふようにした。

私自身は教育学部の助手やアジア太平洋研究科の助教として職が決まる折ごとに勝方先生にご報告した。勝方先生は学内のレストラン楠亭でお祝いをしてくださり、「こういう風にお祝いできるのは、とてもうれしいのよ」とご自分のことのように喜んでくださった。

進むべき道に迷った時に勝方先生からの一本の電話に助けられ、今、研究者としてナントカ独り立ちをすることができている。20年前の勝方先生からの一

勝方＝稲福恵子先生を送る

本の電話がなければ、今、どういう道を歩んでいただろうか。私もいつの日か、勝方先生が手を差し伸べてくださったような方法で、少なくともそういう気持ちで、進む道に迷う人に手を差し伸べることができるようになりたい。

数年前に、「馬場歩き」をしている勝方先生にばったり遭った。くるくるとまいた素敵なヘアスタイルに、いつもと変わらずおしゃれなたたずまい。そして、やっぱり先生は、「あなた今、何しているの？」と声をかけてくださった。子どもの保育園のお迎え時間が迫っていたため足早に近況報告した私に、先生は「あなたに何かあげたいわ」と、カバンの中に手を入れてごそごそ何かを探してから、小さな飴を一つくださった。あの電話から 20 年経っていて、もう 20 代半ばの私ではないのだけれど。